



ザ・ターニングポイント

会社発展の契機となった転換点を紐解く

長きにわたる企業の歴史のなかにはいくつもの転換点があります。

異分野への事業展開、新しい取引先の獲得、技術開発によるブレイクスルー、あるいは苦境から脱した契機など、現在の発展につながった各社の「ターニングポイント」を紹介します。（この連載では創業から半世紀以上の会員企業にフォーカスします）

第17回

レックス工業 株式会社

輸入工具の国産化を目指して創業

レックス工業株式会社は大阪府東大阪市に本拠を置く、配管用機械機器のメーカーです。創業以来、水道・ガス・空調などの配管工事における顧客固有の課題解決と作業の効率化、快適化を目指した製品・サービスの提供をされています。

創業者宮川作次郎氏は、1892（明治25）年に石川県で生まれました。14歳にして故郷を離れ、義兄が営む大阪の輸入工具店「池田商店」に丁稚奉公に出ることになり、仕事に励むかわら、川口商業学校の夜間部に通うなど、昼夜を惜しまず苦闘11年の末、1917年25歳の時に独り立ちして「宮川商店」を開業しました。

しかし、やっと軌道に乗り始めた宮川商店も、1923年9月の関東大震災の余波で予期せぬ打撃を受け、数多くあった東京の得意先の売掛金が回収不能となって行き詰まり、心ならずも倒産。作次郎氏33歳の時のことでした。

一から他の商売を始めるのは簡単なことではありません。作次郎氏は以前の店で輸入工具を扱っていましたが、そうした製品の国産化を考えました。ものづくりをしたことのない素人が造るのは冒険であり、「商人が工場をやっても成功した試しがない」と多くの人から言われましたが、作次郎氏の決意が揺らぐことはありませんでした。



創業者 宮川作次郎氏

宮川工具研究所の設立

1925年8月、大阪市西区境川に「宮川工具研究所」を創設しました。あえて研究所と名付けたのは、“人生はすべて研究だ”と言い続け、お客様のための製品開発に精魂を注がなければ、と自分を戒めるためでした。

最初に手がけたのが手回しグラインダーでした。輸入したグラインダーを分解し、これに改良を加えるために、自ら治具の製作も手がけました。この手回しグラインダーは、輸入品の半額で販売することができ、売れ行きは好調でした。

作次郎氏はできあがった製品を、迷惑をかけた取引先にも買ってもらい、その利益で少しずつ負債を返済していきました。また、さまざまな工具の研究も進め、次々と改良し国産化していきました。研究・改良を重ね、少しでも良い製品を出して世の中のためになるよう、また震災時に多くの人々に助けてもらった感謝の気持ちを忘れないように、との強い思いからでした。

ちなみに、倒産時の大きな負債の返済は、こうした形で1942年まで19年間も続きました。そして1946年、経営組織を法人に変更し「合名会社宮川工具研究所」を設立。現在の礎を築いていきました。

障がい者とともに働く会社

1937年に日中戦争が始まり、従業員が軍に召集されると、しだいに事業の存続が困難になってきました。そんななか、作次郎氏は聴覚障がいの方々が

真面目に働く姿に接し、「この人たちに当社で働いてもらおう」と翌年から採用を始めました。以来、継続的に採用を続け、多い時には、工場従業員の3分の1を占めたこともあります。こうしてレッキス工業は「障がい者とともに働く会社」として知られるようになりました。また、社内には健常者と一緒にその働きが評価される仕組みが定着しています。

作次郎氏は1970年に大阪府布施障害者雇用対策協議会を設立し、同社がその事務局を担い、毎年「東大阪ふれあい祭り」でバザーを実施するなど、近隣の方々の協力を得ながら、現在も活動を継続しています。退職などで障がい者の確保が厳しくなっていますが、今後も障がい者雇用率10%以上（法定障がい者雇用率は2.5%）を継続することを念頭に採用に奔走しています。



ふれあい祭り

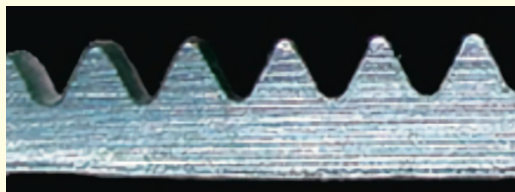
インフラを支える配管アイテム

“Made in Japan”は「高品質」だと世界では定着していますが、とりわけ地震、災害の多い日本市場の配管に求められる品質レベルには、とても厳しいものがあります。

国内では配管での耐震化という社会的なニーズに応え、配管材料メーカー、ガス・水道事業者との連携により、新たな配管工法の開発に注力し、鋼管の耐震性、耐久性を大幅に改善した同社独自技術の「転造ねじ」や、耐震性に優れたポリエチレン（PE）管の施工に必要な融着機器を生み出しています。

同社がトップメーカーとしての技術蓄積をベースに、10年がかりで完成した自信作が1996年に投入した世界初の「可搬式ねじ転造機」。転造ねじは従来の切削ねじの1.5～1.7倍の肉厚が確保でき、金属組織が切断されない塑性加工なので、強度と耐久性が母材と変わりません。

従って転造ねじ加工したパイプは力を加えても折れず、振動に強く、錆びにくい。結果的に漏れにくい配管ができるのです。

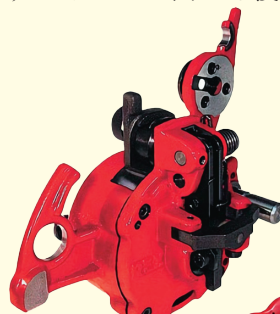


転造ねじの断面 強度と耐久性に優れる



切削ねじの断面

これまで工場設備でしか加工できなかったのを、「歩み転造」という新技術により、簡単操作とコンパクト化に成功しました。ビル空調や工場設備配管、ガスおよび水道管などの施工現場にキャスターで移動でき、各種鋼管へのテーパねじ転造が手軽に行えるようになりました。さらに、レッキス工業の既存のパイプマシンに「自動オープン転造ヘッド」を載せるだけで加工できるようになるため、使いやすさやコスト面でも優れています。



自動オープン
転造ヘッド



ねじ転造機 NZT シリーズ

時代とともに変わる配管の管種と工法

ガス用ポリエチレン管は、阪神淡路大震災、新潟中越地震、東日本大震災においてもその耐震性が立証されました。

地震大国である日本において配管の樹脂化は自然な流れとなり、これまでの埋設鋼管の代替品として樹脂配管への置き換えが進められています。

樹脂は一般的に紫外線で劣化する性質がありますが、埋設配管なら日が当たらないので好都合というわけです。因みに、埋設鋼管として、都市ガス配管では黄色の樹脂管、配水配管では青色の樹脂管が使われています。

樹脂管の場合、管の接続には、電氣的に表面を溶かして繋ぐ融着技術が使われており、そのための特殊な融着機器が求められました。同社は、1980年代に入り、大手配管材料メーカーや大手都市ガス供給業者の依頼を受け、対応する機器の共同開発に着手しました。ライフライン確保のため、日々新製品の研究開発を進めています。



地震に強いPE管での配管

「建築設備技術遺産」に認定 伝統と革新の融合

2020年、同社の「自動切り上げダイヘッド付き切削ねじ切り機」と「転造ねじ加工機」が、第38号の「建築設備技術遺産」に認定されました。

建築設備技術遺産とは、建築設備における空調・衛生・電気・搬送の4つの領域に関する技術と技術者の歴史的な足跡を示す具体的な事物・資料であり、建築設備技術の進歩・発展において、重要な成果を示したもののや、生活、経済、社会、地球環境、技術教育に貢献した、または、当時を反映する技術遺産である建築設備技術、のいずれかに合致するものをいいます。

レックス工業は、1929年日本で初めてオスタ型パイプねじ切り器の国産化に成功したことからはじまり、その後自動切り上げダイヘッド付きのパイプマシンが登場したことにより、作業者の経験と勘

に頼っていたねじ切り作業は、未経験者であっても熟練者と同じ品質でねじ加工ができるようになりました。さらに、このねじ切り機に続いてより良い丈夫な配管ねじを実現するために、塑性加工でねじ加工を行えることができる転造ねじ加工機の量産化にも成功しました。

ねじ部の肉厚を確保できるため溶接並みの機械的接続強度を実現し、耐環境性、耐腐食、配管の長寿命化にすぐれたねじ接合の可能性を切り開きました。こうした技術の積み重ねと革新との融合が建築設備技術遺産に値すると認められたのです。

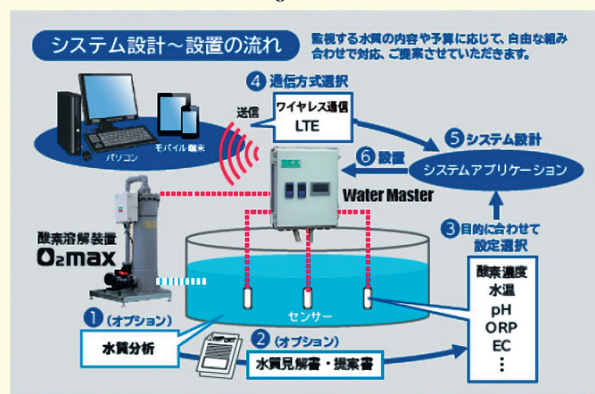
Turning Point

配管メンテナンス分野への事業拡大

バブル崩壊とともに国内の建設投資が激減、同社が得意とした配管を継ぐ、切る機械の販売だけでは、じり貧状態に陥ることが予測されました。そこで、これから需要増が期待される配管メンテナンスに対応した機械工具の開発に取り組み、配管内の状態を映す「管内カメラ」、配管内を洗浄する「洗浄機」、配管内の圧力が適正に保たれているかを確認する「みるみる君」など、電子技術を駆使した商品を上市することができました。こうした電子技術の蓄積により、世の中で求められている「お客様の働き方改革」へのきめ細かな対応が可能となり、需要拡大が期待される陸上養殖システムの開発に繋がっていききました。



管内カメラ



陸上養殖システムの展開図

レックス工業には、“ワーキングアメニティ創造企業になる”という合言葉があります。“働く楽しさの提供”を商品づくりに求める同社の造語ですが、商品・サービスの提供を通じて、快適な作業環境づくりを目指しています。

大手事業者からの信頼を獲得

パイプマシンの開発、販売に長年専念してきたことで業界での存在感も高まり、大手事業者（ガス事業者、ゼネコン、パイプメーカなど）から、直接開発依頼がくるようになりました。大手事業者にとっては、新しい配管機械を自社で開発するより、ノウハウの蓄積があり、サービス体制がしっかりしているレックス工業に頼む方が得策だと考えるのは必然でしょう。そして、“ねじのことならレックスに聞け！”と言われるほどに信頼を獲得したのです。

レックス工業の開発部門では、設計・試作の段階からユーザーの声を積極的に吸収するほか、機器の使い方の講習会を行うなど緊密な関係を保っており、新しい配管工具の開発、より良い商品づくりへの挑戦が続けられています。

「三利の向上」を推し進める 経営品質向上活動への取り組み

創業者は、自分に厳しく、仕事面では社員にも厳しい人でした。人間愛に裏打ちされた厳しさで、甘えや妥協を許さず、真剣に生きることの大切さを自らの姿勢や行動で示しました。

“いかに儲けるか”を考えることは企業としては重要ですが、それを推し進める従業員のモチベーションをいかに高めるかも同時に重要です。同社には創業者が掲げた「三利の向上」という社是がありますが、これは「お客様を利する」「従業員を利する」「社会を利する」の3つの利をバランス良く追求していくことが、事業の存続において不可欠であるという考え方です。

2008年から始めた「経営品質向上活動」は、この社是を再認識する契機となりました。経営品質向上活動は、「儲ける力」すなわち業務能力の向上と、それを支える組織能力の向上（チーム力）をうまくバランスさせていこうという活動です。



外部の力も借りながら、組織能力の改善に取り組み、2014年には「関西経営品質賞優秀賞」を受賞されました。受賞後も強固な組織力を維持するため、経営品質向上活動はたゆまず続けられています。

レックス工業は、今年8月1日に創業100周年を迎えました。これからも創業魂と社是は綿々と受け繋がれ、ライフラインを支える配管用機械のメーカーとして社会に貢献していかれることでしょう。



REX

<会社概要>

本社所在地	大阪府東大阪市菱屋東 1-9-3
事業内容	配管用作業機具製造・販売
創業	1925(大正14)年8月
資本金	9,000万円
従業員数	190名(2025年6月現在)



同社ホームページにリンクします▶